
ラブカクテルス その37

風雷人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ラブカクテルス その37

【Zコード】

Z2630D

【作者名】

風雷人

【あらすじ】

今宵は少し埃っぽいカクテルを用意しています。いかがでしょうか？ご賞味あれ。

いらっしゃいます。
どうぞこちらへ。

本日はいかがなさいますか？

甘い香りのバイオレットフレイズ？

それとも、危険な香りのテキーラサンライズ？
はたまた、大人の香りのマティニー？

わかりました。本日のスペシャルですね。

少々お待ちください。

本日のカクテルの名前はキャタピラーな生活でござります。

じゅつくづくづく。

良かつた。私はやつと降った雨に、久しぶりの洗濯が出来ると胸を
撫で下ろした。

ここは土埃の世界。

昔は道をアスファルトやコンクリートで舗装という整備をして綺麗
な街を保ち、平和だったと聞くが、今は異常な天候がどこからとも
なく凄い量の土埃を運んできて、地上の何もかもを土埃が覆い尽く
していたのだった。

お陰で晴れた普段の日は、外の世界がどこもかしこもパフパフ。
少しでも風など吹こうものなら洗濯物までパフパフ。いや、そん
な程度の話だけでは済まされないが。
けれど雨の日はもつと凄い事になる。
土は水を得て泥になる。

ペトペトだ。

直接靴を履いて表を歩こうものなら、靴底は泥がこびり付き身長が伸びるくらいの勢いで積み重なつて始末に負えない。

はたまた、ぬかるんでいよるものなら底無し沼のようにはまり、しまいには本当に足を取られるくらいでは済まされずに、呑み込まれてそのまま抜け出せずに、行方不明なんてことも年間何件かはあつたらしい。

恐ろしい。

しかし、この頃はそういう無謀な事をする人はいなくなり、家中も完全に外部と遮断されて、土や泥は入らなくなつた。

それもこれもキャタピラーが一躍かつて出てくれているおかげでもある。

キャタピラーは始め、ただの作業用機械に使われるための車両だつた。

しかし事情が変わり、それまでは車といえば、四本のタイヤで走るカツコイイ乗り物だつたが、この世の中ではもう何の役にも立たなくなり、この頃はたまにアンティークな飾りとして街中で見かけるくらいのものに引き下がり、そしてその車に取つて変わつたのがキャタピラー付きの車だつた。

昔でいえば戦車やショベルカーといったイメージが強いキャタピラーダが、今はその運転席に大砲や、ショベルが付いていない、しかも近頃の新車のキャタピラーは、斬新なデザインのものもあり、かなりの進化を遂げている。

鉄の帯がグルグルと回り、どんな所でも走る様はとてもたくましい。振動はある程度あるが、それは仕方ない。何しろ地面自体が凸凹なのだから。

でもコンピュータ制御で運転席と車体の間のエアクッションが、ある程度の揺れを調整してるので、その辺はそれほど気にならないのだった。

そしてあなどれないのは内装で、かなりのデラックスな作り。

オプションでシートがマッサージチェアのものまであるくらいで、床はジュークン並のフカフカさ。もちろん冷暖房完備だった。

それに操作性も優れていて一本のレバーを行きたい方に倒すだけのシンプルな設計。しかも車体 자체を回さなくとも運転席だけが独立して旋回するので、後ろ前も自由に変えることができる。

だから車社会の頃と違つて、交通事故というものはかなり減り、このところ滅多に聞かなくなつた。

そして何より画期的なのはチューブと呼ばれる乗り降りの時的方法だつた。

ここ近年、土埃と泥から生活を守るために、家という家全てにチューブイン設備を付けることが義務化された。

これは、キャタピラーと建物をチューブ状のもので連結。そして二重の扉をエアー吹き出し掃除機能により洗浄。これにより、キャタピラーから家や、スーパーといった建物全ての出入り方法にこの設備が使かれたため、移動の時はそこからの乗り降りで、外部と完全に遮断された生活ができるようになった。

その前までは、身体中を何重もの重ねられたコートや、ゴーグル、それに帽子や長靴などがないと外には行けずに、例え目的地や自分の家に着いて中に入るとしても、入り口や玄関の手に必ず備えつけられていた部屋で、念入りにエアーシャワーを浴びて、その後に土センサーを浴びせられて大丈夫なら入室できる、という生活だった。しかしそこまでもして、完全に社会を土からは守れず、三日に一回の清掃を欠かしたものら、建物のなかはパフパフになり、どうやっても土からの解放はあり得なかつた。

そんなこともあり、人が使う施設全て、公園や湖や川などの遊園施設から、生活に必要な全ての建物をドーム化して、チューブインゲートを導入することで、土埃と泥からの闘いに終止符を打つた。

人類は土埃と泥に勝利したのだ。

そして私達は昔の様に、衣服にお洒落をして出掛けられるよつになつたことで、ファッショントリック文化が戻ってきた。生活はとても平和になった。

しかし、一つだけ問題があつた。それは湿気だつた。

湿気はドームの中で暮らしているせいで、外へ出しきれずに溜まつたものが、この頃問題になつてゐる。

乾燥しているのも考え方だが、湿氣でいるのも厄介だつた。カビの発生や、窓枠周りの水滴。それに家電ものへの悪い影響はかなり著しかつた。

そのために、雨の日にはドームを開ける決まりができ、洗濯や風呂などの過剰な湿気が出てしまつ事に関しては、その時を機会に行うこととなつた。

洗濯はその季節によつて衣類の溜まり方も違つが、一回に洗う量は相当なものだつた。そのため衣類はなるべく消臭と消毒を兼ねたスプレーで普段は済まし、この頃は洗濯機も水で洗うタイプから、温風で洗浄するものが増えてきたらしいが

、仕上がりはイマイチだと聞く。

しかしあのパフパフとドロドロのペトペトな世の中に比べれば、今
の生活は天国
だ。

俺の仕事は修理工。

修理するのはキャタピラーだ。

いつもいつもパフパフビードロドロのペトペトの世界で仕事をする。
ひどい世の中だ。

風が吹けば、前はたちまち見えなくなるし、しかも電動工具や、工

ンジン式の機械はすぐに土埃でやられてしまつために、ほとんどが使い物にならない。

だから仕事の主力は人力だ。

今日も、継ぎ目がない作業服を着込んで表に出る。顔まですっぽりと覆われたヘルメットはかなり視界が広いが、あつと言つ間に真っ白になつて、グローブで擦ろうものなら、直ぐに静電気がいたずらをして、余計に土埃を集めてくる。

そんな時はお手上げだ。何をしても無駄。

俺達は一人一人、自分で携帯エアーシャワーを持つている。あまりに土埃がひどいとそれで対処するが、まあ、何とかの追いかけっこだ。だからあまり細かい事が気になる人には、この仕事は向いていない事になる。

もうもうと吹いてくる土埃の隙間を狙つて仕事をこなす。これが一流の職人つてもんだ。

気質と起用さが、この仕事には必要だった。

一応、こんな誰もしたがらない仕事だから、普通に比べればお金はいいが、やりがいがあるかと言えばそうでもない。

何せ仕事の時間よりは土埃を落としている時間が時間が係る。しかも外での作業は、土埃を防ぐフィルターに時間制限があるために、作業時間が決まつていて。だから作業がいくらもう少しこう時でも、一回引き上げなければいけなかつたりすると、気持ち的にはすつきりする仕事でもない。

普通の生活をしている人には分からぬだろうが、嫌な仕事だ。

しかし俺は、昔から頭がいい方ではないし、人に頭を下げるのもよろしくない性分だから、こんな仕事が合つてゐるのだろうが。

俺はそんな事を考えながらキャタピラーの欠けた部分を修理していく。

するといきなり、吹いていた風が止んだのに気が付き、手を止めた。立ち上がって、その不思議な感覚に周りを見渡した。

すると雨が降ってきた。しかしなんて静かな雨なんだ。
いつもと何かが違っていた。

胸騒ぎが体を襲つてきたが、その理由は分からなかつた。
気を取り戻して、作業を続けていると、その手元に白いものがフワ
ツと落ちてきた。

雪：

雪だ。生まれて初めて見る雪は段々とその一つが大きくなつて、し
まいには、あつと言う間に辺り一面を真っ白にしていつた。
作業服を着込んでいるせいで、寒さが全然感じていなかつたために
気付くのが遅くなつたのだった。

俺は興奮した。

そして、昔本で読んだ事のある雪だるまを、周りの同じよにほし
やいでいる奴らに声を掛けて、仕事そっちノケで作り始めた。

俺達はそれから雪合戦もした。

なんて雪とは楽しいのか。

思わず俺達は童心に帰つてはしゃぎまくつた。

そして皆、思い出にと、沢山の小さい雪だるまを作り、瓶に入れて
家に持つて帰つた。

ある者は玄関に飾り、ある者は子供にあげて、ある者は恋人との口
マンチックな演出に使つた。

その次の日、街は初めてのクリスマスという催しを行い、大量の雪
で色々な飾りが成された。

とても大きく話題になり、盛大に祭りは盛り上がり、そして幕は閉
じた。

街の皆は疲れ果てて、終わった後は静けさが辺りを覆い、しかしそ
の影で、溶けだす雪から少量の土が、その水に乗つて流れ出して、
街中のあちこちに入り込んでいたのだった。

おしまい。

いかがでしたか？

今日のオススメのカクテルの味は。

またのご来店、心よりお待ち申し上げております。では。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2630d/>

ラブカクテルス その37

2011年1月1日10時19分発行